TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

東北学院資料室

LIFE LIGHT LOVE

Vol. 4
2004.12.31

東二番丁・中高赤レンガ校舎

《1922（大正11）年～1979（昭和54）年》
外壁総煉瓦造で屋根・床はコンクリート、暖房はスチームと、近代的な要素を取り入れていた。1978（昭和53）年の宮城県沖地震により危険と判断されたため、翌年に解体された。

学校法人東北学院

CONTENTS

ごあいさつ　東北学院長 倉松　功 …… 1

『東北学院時代の鈴木義男』
仁昌寺 正一 …… 2

法科大学院・総合研究棟 …… 8

多賀城キャンパスにパイプオルガン設置 …… 9

大学祭〈工学部祭〉…… 10
〈泉キャンパス祭〉…… 11
〈六軒丁祭〉…… 12

第5回ホームカミングデー『同窓祭』…… 14
―懐かしい出会いがそこにある―

第2回東北学院大学文化講演会 …… 18

想い出の東北学院中学・高等学校校舎 …… 20

中学・高等学校 新キャンパス見学会 …… 26

特別展示・大正デモクラシーと東北学院
岩本 由輝 …… 28

キリスト教学科設置40周年記念式 …… 30

ドラフト会議 …… 31

2004（平成16）年度時事 …… 32

東北学院資料室規程（改正）…… 34

資料室来室・利用状況 …… 35

ラーハウザー記念東北学院礼拝堂内ステンドグラス

使徒言行録1章6節－11節より
「使徒達に最後の祝福を与えて昇天する復活のキリスト」を描いている。英国製。

ごあいさつ

「東北学院資料室」第４号発行にあたって

東北学院長　**倉松　功**

東北学院資料室が土樋キャンパスのラーハウザー記念礼拝堂の地階に2001（平成13）年5月に開設されてから約3年半が経過しました。その間、多数の同窓生、学生、生徒、市民の方々に本学院118年の歴史の品々をご覧いただき、感謝申し上げます。

当資料室は、本学院の三校祖の押川方義、W.E.ホーイ、D.B.シュネーダーにかかわる資料や写真を中心に常設展示（約200点）をしております。一昨年からは、創立120周年記念事業として「大正デモクラシーと東北学院」をテーマに、わが国の民主主義・社会主義の歴史において独自の貢献をした元理事長杉山元治郎、同鈴木義男などを中心に資料集めと研究をしてまいりました。その成果の一部も展示しております。

その他、昨年を回顧しますと2月に土樋キャンパス（仙台市青葉区）に「法科大学院・総合研究棟完成」、3月に「学都仙台サテライトキャンパス」開設の協定調印が行われました。4月には星宮望（ほしみや のぞむ：昭和35高卒）第4代新大学長の就任、法科大学院の開学。5月には多賀城キャンパスに念願のパイプオルガン（ドイツ：カール・シュッケ社製）が設置されました。

10月には恒例の第5回ホームカミングデー（同窓祭）が大学祭とともに盛大に開催され、卒業後20年（昭和59大卒）・30年（昭和49大卒含）・40年（昭和39大卒）・50年目（昭和29大卒・短大卒）の多くの同窓生や元教職員が交流を図ることができました。秋には2回目となる「東北学院大学文化講演会」が盛岡市で岩手県各支部の協力を得て大々的に開催されました。11月に中学・高等学校では新キャンパス（宮城野区小鶴）の見学会を在学生・保護者、学校関係者・一般の方々を対象に催しました。

国際交流関係では3月24日にオーストラリアのニュー・サウスウェールズ大学と、3月30日にカナダのビクトリア大学と6月17日にはフランスのサヴォア大学と、それぞれ国際交流包括協定を締結し、現在協定校は11校を数えるに至りました。大学が目標としている国際交流に少しずつ近づいております。

東北学院資料室では、先人たちの各分野での地の塩、世の光としての活躍の足跡を今後も蒐集し、紹介してまいりたいと思っております。ご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

回　想

東北学院時代の鈴木義男

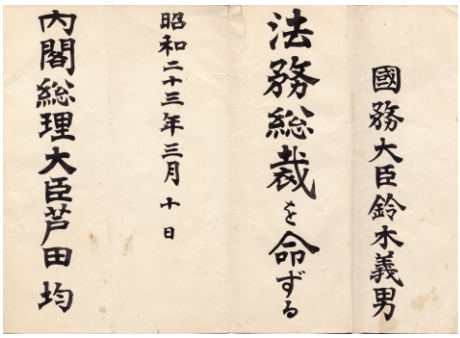
東北学院大学経済学部 教授
仁昌寺 正 一

1. はじめに

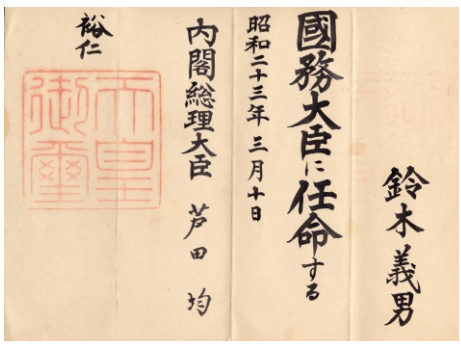
現在、東北学院では、「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会が設置され、大正・昭和戦前期を中心に、日本近代史に大きな足跡を残したOBを調査・紹介する作業が続けられていることは周知の通りである。このような人物の一人としてクローズアップされているのが、鈴木義男である。

鈴木義男

鈴木は、1894（明治27）年1月17日、福島県白河町（現白河市）田町に、義一を父とし、イエを母として生まれた。第6子で三男であった。1907（明治40）年3月に白河町尋常高等小学校を卒業後、同年4月に東北学院普通科（中学・5年制）に入学、1912（明治45）年3月に同校を卒業している。つまり13歳から18歳までの5年間を東北学院で過ごしたわけである。その後、第二高等学校、東京帝国大学法学部に学び、1924（大正13）年には東北帝国大学法文学部教授に就任している。1931（昭和6）年に同職を辞し弁護士になっているが、このなかで、「労農派教授グループ」をはじめとする治安維持法違反事件被疑者の弁護を積極的に引き受けている。第二次大戦後には政治の世界に身を投じ、1946（昭和21）年の総選挙で衆議院議員に福島2区から立候補して当選、以後1960（昭和35）年まで7回の当選を果たしている。この間、1947年6月に片山哲内閣の司法大臣に、また1948年3月には芦田均内閣の法務総裁（国務大臣）に就任している。また、この間には専修大学教授・理事長・大学長や青山学院大学教授も勤めている。母校東北学院との関係では、1947年7月に杉山元治郎の後を受けて第6代理事長に就任、以後1963年の長逝まで同職を勤めている。



國務大臣鈴木義男
法務総裁を命ずる
昭和二十三年三月十日
内閣総理大臣芦田均



鈴木義男
國務大臣に任命する
昭和二十三年三月十日
内閣総理大臣　芦田均
裕仁

写真上：法務総裁辞令　下：国務大臣辞令（提供：鈴木瑠留子氏）

このような経歴をみただけでも、彼の69年の人生が波瀾に満ちたものであったことがわかるであろう。ここでは、このような経歴のうち、さしあたり東北学院普通科に在学していた5年間の生活がどのようなものであったかを探ってみたい。幸い、彼の没後1年後に作成された鈴木義男伝記刊行会編『鈴木義男』（1964年12月）には、彼の東北学院在学時の友人や後輩たちによる回顧があり、また当時の『東北文学』（東北学院文学会）には彼の作品が掲載されている。さらに当時の『東北学院労働会日誌』（東北学院労働会）と『河北新報』には彼に関する記述が

『鈴木義男』鈴木義男伝記刊行会編

かなりみられ、それゆえそれらを利用することで、当時の様子をある程度再現することが可能ではないかと思われる。

2. 東北学院への入学

それに先立ち、白河町で生まれ育った鈴木義男が、あえて仙台市の東北学院に入学した理由・動機について一言しておこう。

前掲『鈴木義男』によれば、その主な理由・動機は二つあった。一つは、「父義一の親友である押川方義の創立にかかり、シュネーダー院長のもとにキリスト教精神に基づく教育が、おこなわれていたため」(30頁) である。

白河美以基督教会　右端の看板前が義男の父義一

義男の父・義一についてみておくと、彼は、1858 (安政5) 年生まれで、1882 (明治14) 年頃、年齢でいえば24歳頃、医学者になるべく水戸医学校に学んだが、それを契機に欧米文化に強い関心を持つようになり、やがてキリスト教を信仰するようになったという。そして「肉体の医者より精神の医者」たるべしの信念の下に、キリスト教 (メソジスト系) の伝道者に転じ、各地を十数年に亘って伝道して歩いたという。仙台にも、1886 (明治19) 年2月から1889 (明治22) 年9月までの3年間余滞在しており、この間、押川方義とも布教活動を一緒に行うなど親しく交流している。そのことは、例えば、『日本メソジスト仙台教会五十年略史』(『仙台五橋教会史――115年のあゆみ――』、2000年12月第2章に収録) に、

「同年 (1886年……引用者) 4月27日、長老司ハリス博士函館より来仙、二夜、北目町宮城座において基督教大演説会を開き幻燈を以て耶蘇を説明した。弁士は押川方義、菅田勇太郎、鈴木義一、ハリス師諸氏で両夜とも1000名以上の聴衆があった。」(82頁)

という記述があることでも裏付けられる。尚、この両日の演説会については、同年4月30日の『奥羽日日新聞』の広告欄にも掲載されている。

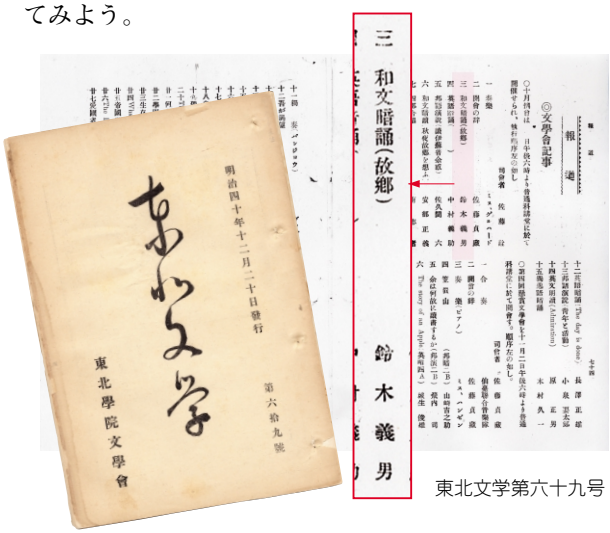
義一は、このようにして全国を転々としていたが、やがて独立自給の伝道こそ本命なりと確信するに至り、生まれ故郷の白河町に帰り薬屋を営むかたわら、白河メソジスト教会の牧師として働くようになったという。そして、息子の義男の中学進学が近づいていた頃、「シュネーダー院長が白河教会に応援伝道に行かれた際、……尊父が院長の崇高な人格に接し、義男を東北学院に入学させる約束をなされた」(前掲『鈴木義男』、27頁) ということである。

ともあれ、義男の東北学院入学には、自ら熱心なキリスト教信者であり、息子にも、指導者達との交流があった同校でキリスト教教育を受けさせようとする父・義一の強い意向がはたらいていたのである。

もう一つは、「労働会なる施設があり、労働をしながら、学校にかよえるという特徴があった」(同上、30頁) ことである。このようにしなければならなかったのは、いうまでもなく経済的事情からである。鈴木家は、白河地方きっての旧家の一つで、江戸時代には、代々、苗字、帯刀を許されて、検断、駒付役等の役職についていた大地主であったものの、明治維新以降には、製紙事業への投資の失敗などで家運が傾き、田畑を手離すに至っていた。それゆえ義男が中学に進学しようとすれば、やはり苦学生にならざるをえなかったのであるが、当時の東北学院には、そうした学生を受け入れる「労働会」という組織があったのである。

3. 低学年時から東北学院文学会などで活躍

さて、鈴木義男は、東北学院でどのような学生生活を送ったのであろうか。前掲『鈴木義男』所収の東北学院在学時の友人達の回顧によれば、学内で定期的に行われていた文学大会や懸賞演説会、さらには学外での懸賞演説会や懸賞論文でも大活躍したという。そこでまず、彼のこのような活動に目をむけてみよう。



東北文学第六十九号

1年生時（13〜14歳）をみると、当時10月と2月の年2回開催されていた東北学院文学会の例会に2回とも出場している。デビューは、入学半年後の1907年10月12日に開催された例会であった。15人の出場者のほとんどが2年生以上で占められているなかでの出場で、「故郷」という題での朗読を行っている（『東北文学』第69号、1907年12月20日発行、74頁）。翌年2月21日に開催された例会にも出場し、「瀬戸内海」という題での朗読を行っているが、これについては、翌日の『河北新報』が、

「△鈴木君の邦文朗読、瀬戸内海。年少の割には大胆にやった。将来有望とでも言って置こう」

と報じている。

2年生時（14〜15歳）には、1908年11月14日に開催された「第5回東北学院懸賞文学会」に出場し、3年生以下の部で、見事1等賞を獲得している。「真正の英雄と所謂英雄」という題での朗読であったが、この時の様子について、『東北文学』第72号（1909年2月25日発行）は、

「議論堂々として当路の敵手を微塵に砕くの慨あり、論旨整然として一糸の乱れもなく水も漏さぬとや言はん、典麗の辞藻溢るるが如く、荘重の快弁流るるが如し、然かも其音声の優美なるに至りては満堂をして悉く酔はしめき、巧みなるかな君の演説や、基督の一生は乞食の如し底の警句を繰りて幾度か聴衆をして握らしめたる等人心収攬に妙を得たる君が如きはまことに稀なり、蓋し当夜に於ける万緑の一紅点たるを失はず、君夫れ慈愛する處あれ。」（117頁）

という記事を掲載している。

3年生時（15〜16歳）には、1908年11月22日に開催された「第6回東北学院懸賞文学会」に「邦文朗読月下の感」で出場している。また、翌年2月10日は、東北学院文学会の例会に出場し、「故郷の春を懐う」という題で朗読を行っている。後者については、『東北文学』74号（1910年3月24日発行）が、

「殆ど十分の間、音吐朗々、聴衆の前に平和の故郷を活躍せしめたる、手腕と準備とに至ては敬服すべかりき」（88頁）

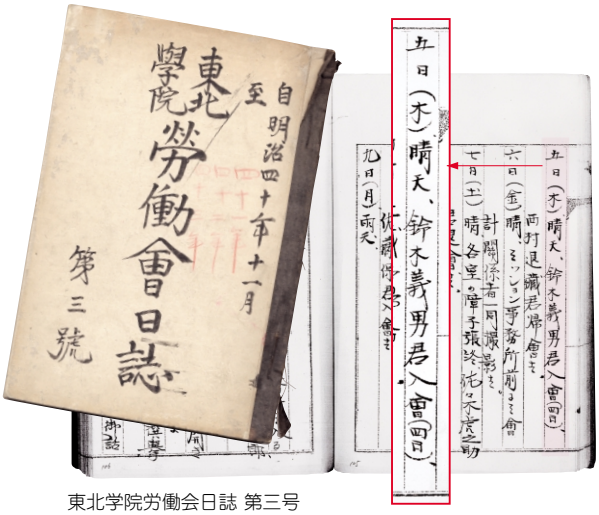
という記事を載せている。

以上が3年生までの鈴木義男の文学会や懸賞演説会などでの活動の様子であるが、それらに対する上述の如き高い評価をみれば、この間だけでも、年々、この方面での力を伸ばしていったことがわかる。

4. 働きつつ学ぶ

労働会での活動はどのようであったのか。

『東北学院労働会日誌』によれば、1908年11月の



東北学院労働会日誌 第三号

頃に「五日㈭晴天、鈴木義男君入会（四日）」とあり、彼が2年生の後期にあたるこの年の11月4日に労働会に入会したことがわかる。また、この2週間後の11月20日には、誓約書にあたる「在会証書」を、署名・捺印の上、「労働会会長デー・ビー・シュネーダー」に提出している。因みに、誓約の文言をみると、

「私儀今般御会へ入会御許可相成候ニ就テハ御規則堅ク相守リ東北学院普通科卒業マデハ許可ナク休学、退会等到間敷、万一右様ノ事有之候カ、或ハ不都合ノ事アリ退会ヲ命ゼラレ候節ハ兼テ差出シ置キ候保証金金額ハ御会ニ御没収被下候テモ決シテ異議申間敷候、依テ在会証書差出候也」（『東北学院大学労働会在会証書』より）

という厳しいものであった。

なお、鈴木が2年生の後期まで労働会に入会しなかった理由は定かでない。

また、小笠原政繁が「丁度私が年十九歳、南国土佐を後にして憧れの東北学院普通科第一学年に入学したのが明治四十一年（1908年…引用者）四月であった。六月に労働会に入会した時、鈴木君はそこの十三号室にいた。」（前掲『鈴木義男』、27-28頁）と回顧していることとも符合しない面がある。これらのことについては、今後検討してみる必要があろう。

労働会入会後の鈴木の動向、とくに帰省の時期・期間・事情などについては、前掲『東北学院労働会日誌』によって把握することが可能である。参考までに、彼の名前のある箇所をピックアップしてみると、次のようである。

1909（明治42）年

2月22日㈪「鈴木義男君、母堂急病との報に接し帰省ナス」

3月 5日㈮「鈴木義男君帰会ナス」

2月26日㈮「遊佐峻、遊佐重四郎、千葉良治、鈴木義男、佐藤保の五氏帰省ナス」

4月12日㈪「遊佐重四郎、梅津米蔵、鈴木義男の三氏帰会ナス」

6月14日㈪「鈴木義男君病気」
7月13日㈫「晴天、大類五郎、森村惣吉、鈴木良四郎、山崎吉之助、鈴木義男、田中惣七、山中丑松の諸氏帰省ナス」
8月30日㈪「晴天、鈴木義男君帰会ナス」
12月23日㈭「池田直記、西渕巌、鈴木義男の三君帰省ナス」
1910（明治43）年
1月 9日㈰「鈴木義男君、志賀秀望の両君帰会せり」
5月29日㈰「雨天、……鈴木義男君病気となる」
7月10日㈰「雨天、……本日帰省の途かれたるもの左の如し、菊地実、志賀秀望、横山民五郎、鈴木義男の四君」
10月 1日㈫「晴天、……鈴木義男君帰会せり」
11月23日㈬「晴天、午前八時より東北学院普通科講堂に於て市内各中学校の懸賞演説会あり、会員鈴木義男君は第一等の月桂冠を得たり、本会及び同君のため大に賀すべきことなり、午後七時半頃より塾舎にて有志相集まりて鈴木君の慰労会を開けり、歓を尽して十時頃散会せり」
11月26日㈯「晴天、鈴木義男君祖父病気ノ為メ本日帰省せり」
12月18日㈰「晴、……鈴木義男君帰会せり」
12月23日㈮「鈴木義男君帰省せり」
1911（明治44）年1月16日㈰「鈴木義男君帰会せり」

これをみると、筆者としては意外であったが、鈴木は、非常時は別としても、いわゆる夏休みや冬休みに当たる時期などにかなり長期の帰省休暇をとっている。この日記への記入漏れがないとすれば、帰省が1ヵ月以上におよぶ場合もあったことがわかる。

労働会での労働がどのようなものであったかについては、前掲『鈴木義男』に掲載されている友人達の回顧によってもある程度わかる。小笠原正繁によれば、「毎朝四時半に叩き起こされ眠い目をこすりながらの新聞配達、彼は北山、僕は国分町、素足に草鞋ばき、脛に脚絆を巻き雪路を走るのは並大抵でなかった。殊に南国育ちの僕は冬の寒さに閉口したが、其時何時も僕を勇気付けたのは鈴木君の元気さであった。」（27-28頁）。また、斉藤四郎によれば、鈴木自身、「君ネ、油売りってのを知らないだろう。荷車にランプ用の灯油を積んで街を引っ張って行くんだヨ。長い柄のついた桝で灯油の測り売りをするんだヨ。僕は恥ずかしかったヨ。（アブラー、アブラー）って呼売りするのがどうしても出来ないんだネ、川内の大橋の河原まで行って、人の居ない所で、大声をあげた憶えがあるヨ。新聞配達なんか、他人の寝静まった早朝にやるから恥ずかしくないだがネ」（68-69頁）と語っていたという。むろん、このようなこと以外にも、労働会が当時行っていたさまざまな仕事にタッチしていたことはいうまでもない。

労働会で働く学生たち

いずれにせよ、鈴木は、卒業時までこのような生活を続けていたのである。

5. 高学年時に弁才・文才を一層発揮

さて、高学年になると、弁才・文才に一段と磨きがかけられ、いくつもの賞を獲得している。なかでも鈴木にとって大きな意味を持っていたのは、4年生時（16歳～17歳）においては、1910年11月23日に開催された「仙台市内中学校学生連合演説会」において、一等賞を獲得したことである。この演説会は、仙台市内の8校（第一中、第二中、東北学院、東北中学校、第二中学林、農学校、師範学校、商業学校）の参加による「東北に於ける唯一の雄弁競争」ともいえるものであり、それゆえ「当日の競争は、実に激烈であった」（『東北文学』第76号、1912年3月10日発行、124頁）。この演説会で、鈴木は、「誰か現代に英雄なしと言う乎」と題する演説を行ったが、結果は一等賞であった。

東北学院４年生の鈴木義男

このときの鈴木の演説について、1910年11月26日の『河北新報』は、

「（学院）鈴木義男氏、英雄が時代を作り時代が英雄を生むかは別物なれども、現代に英雄なしと言うは非なり。極端論者は現代青年の無気力、遊惰を痛罵して古英雄のみ崇拝し、英雄は往事にあり

て現時になしというと雖も決して然らず。明治の代、英雄少なからずとて詳細に例証を挙げ、明治に至りて国運の大発展、大活躍せるは是れ多数英雄の起れる証なり、誰か現代に英雄なしと言うかと叫びて万丈の気を吐く、論鋒被る鋭く、声調、態度、両つながら揃うて大雄弁家の卵たる資質を発揮したり」(『河北新報』明治43年11月26日)。

と報じている。

ところで、鈴木義男の弟・義邦は、このときの受賞にまつわるエピソードを書き遺している。長文であるが、それを紹介することにする。

「それは、明治四十三年十一月二十一日(二十三日の誤り…引用者)の夜のことである。高原性の気候である白河の町は、もうこの季節になれば、夜分の気温は、非常に低くなるので、夜毎、お勝手の、大きな炬燵に、祖父を囲むようにして、伯母と、私達小さな孫三人が、顔を寄せるようにして、祖父の談しを聴くのが日課になっていた。

祖父は『演説会は今日だが、義男の出来は、どうだったろうかな、一等賞のときは電報で知らせる、二等賞以下の時は、手紙で知らせるといっていたのだがナ』といって、柱時計を見上げながら『もう、電報が届いても、いい頃だがな』と、待ち遠しそうな様子だった。

祖父は、孫の一等入賞を既に信じていたのか、二十一日間の塩絶ちの満願の日が今日の演説会当日だったのである。そんなにしてまでも、義男の一等入賞を念願した祖父に対し、その期待を、裏切らない為に、兄も非常に努力したということである。声量を錬成する為に、未明の広滝川原(広瀬川原の誤り……引用者)に立って、毎朝、練習に努めたという。この祖父と、この孫との、呼吸の合った、緊密さを、今にして回顧して、涙がにじむ思いである。

『電報!電報!』

二声三声、店の大戸を叩きながら、呼ぶ声を聞いて、私が、とんで出て、受取って来て、祖父に渡した。祖父は静かに開いて、黙読していましたが、『大願成就』と、ニコニコと破顔した。

目の中に入れても、痛くないという言葉がぴったり、当てはまるような、この孫の為に、神かけた願いは、聴き届けられたのである。

この時の入賞が、その後の兄の生涯に、至大な影響をもつものであったことを、私は信じて疑わない。

その夜、私共幼い者は、九時頃寝に就きましたが、夜中に、何か騒がしいので、眼をさますと、『お祖父さんが、座ったきり、立つことが出来ないんだ』

という。私が、幼い心でたいへんなことになったと思ったが、その時、頼んだ若い衆が来て、祖父を座敷の祖父の寝床へ、運んで寝かせた。

祖父は『大願成就』と同時に、腰が抜けて了ったのである。

祖父は、それきりついに再び起つことなく、その後二週間目の十二月四日に、八十三才を以て、この世を去った。最愛の孫の為に、老境の身に、能う限りの最大のことを、敢行して、心から満足して、往生したのである。何の苦痛も無く、文字通り、安らかに、永眠したのであった。

祖父が倒れると、義男へも、直ちに打電しその翌日、兄は急遽帰省して、祖父を看病した。

祖父は、兄の顔を見ると、さっそく演説会の模様を聴き、『懸賞演説会で、やった通り、やって見せなさい』という。

兄は、自分で、テーブルを据え、墨書した演題を脇に立て、さて当日やった通りを、熱意をこめて、実演した。

祖父は寝床に横たわったまま、熱心に聴いていたが、時々ニコッと笑ったりして、満足そのものの様子であった。これが臨終の床の人の姿とは思えない態度であった。」(前掲『鈴木義男』、9-11頁)

実に感動的な話であり、涙を禁じえない。

5年生時(17〜18歳)において鈴木のさらなる飛躍を意味する出来事は、中学文壇の最高峰と目されていた『中学世界』の懸賞論文で一等になったことである。論文名は「禁酒論」であったという(残念ながら、この作品は入手できず未見である)。かくて、山根篤の言葉を借りるまでもなく、

「中学世界の懸賞論文『禁酒論』に一等に当選された君は、全国の学生間に名声を馳せることとなった」(前掲『鈴木義男』、30頁)

のである。また『東北文学』第77号(明治45年3月15日発行)においても、

「君は弁論の人として、将た文筆の人として学院随一の花形役者である。連合演説の一等当選といい、禁酒論文の一等当選といい、其技倆の程を示して余りある」(87頁)

と絶賛されている。このように、鈴木は、5年生時には全国レベルでも活躍するようになっていたのである。

なお、鈴木は、『東北文学』第76号には、英雄への関心が強いことが窺われる二つの作品(「我校の使命」、「英雄と宗教」)を発表している。また、『東北文学』77号には、卒業にあたって行ったと思われる東北一周旅行に関する三つの作品(「汽車普通」、「八郎潟」、「最後の一日」)を発表している。

かくして、鈴木は、1912年3月26日、東北学院普通科を卒業していった。

6. おわりに

以上、鈴木義男の東北学院での生活を垣間みてきたが、この５年間で、弁才・文才を伸ばし、また労働会で鍛えられ、逞しく成長していったことを確認しうる。

これまで、彼に関しては、その足跡の大きさに鑑みても、十分な評価がなされてきたとはいえなかったように思われる。それゆえ、今後も、引き続き、彼の多方面におよぶ活動を調査し紹介していくことにしたい。

鈴木義男略歴

1894（明治27）年　0歳	1月27日に、福島県白河町（現白河市）大字田町77番地で生まれる。父・義一、母・イエの6番目の子供で、三男であった。（※長男は日露戦争で戦死、次男は1歳で死亡）
1907（明治40）年 13歳	3月に白河町尋常小学校を卒業し、4月に東北学院普通科（中学）に入学。
1912（明治45）年 18歳	3月に東北学院普通科を卒業し、7月に第二高等学校（一部甲類）入学。
1916（大正５）年 22歳	7月に第二高等学校を卒業し、9月に東京帝国大学法学部法律学科（英法研究）入学。
1918（大正７）年 24歳	5月20日、鉄本ときわ（宮城県玉造郡一栗村鉄本文吉三女）と結婚。
1919（大正８）年 25歳	7月に東京帝国大学を卒業し、9月に東京帝国大学法学部助手に採用される（※助手は、1921（大正10）年7月29日まで）
1921（大正10）年 27歳	7月30日より文部省在外研究員として独・仏・伊・英・米に留学。8ヶ月私費延長して1924（大正13）年3月25日に帰朝。
1924（大正13）年 30歳	3月28日に東北帝国大学文学部教授に任ぜられる。4月に行政法学講座担任、5月に特別講義法学概論兼担となる。
1931（昭和６）年 37歳	3月31日に辞職願いを提出し、5月14日に認められる。5月15日に東京地方裁判所に弁護士登録。弁護士事務所は九段一口坂。
1934（昭和９）年 40歳	4月から法政大学教授として行政法・英法を講義（※弁護士活動も継続）
1940（昭和15）年 46歳	3月に法政大学教授を辞す。
1945（昭和20）年 51歳	11月に日本社会党に入党。
1946（昭和21）年 52歳	4月の総選挙で衆議院議員に福島二区から立候補し当選（1回目）。社会党中央執行委員となる。
1947（昭和22）年 53歳	4月の第23回総選挙で衆議院議員に当選（2回目）。6月に片山哲内閣の司法大臣に就任。また、7月には東北学院第6代理事長に就任。
1948（昭和23）年 54歳	3月10日に芦田均内閣の法務総裁（国務大臣）に就任。（※司法大臣は1948（昭和23）年2月15日、「法務庁設置に伴う法令に関する法律」〔昭和22年法律195号〕により消滅）。10月15日に国務大臣を退官。
1949（昭和24）年 55歳	1月の第24回総選挙で衆議院議員に当選（3回目）。
1951（昭和26）年 57歳	3月に専修大学教授となる（※後に専修大学学長、専修大学理事長に就任）。
1952（昭和27）年 58歳	10月の第25回総選挙で衆議院議員に当選（4回目）。
1953（昭和28）年 59歳	4月の第26回総選挙で衆議院議員に当選（5回目）。
1954（昭和29）年 60歳	1月に同志社大学より法学博士の学位を授与される。
1955（昭和30）年 61歳	2月の第27回総選挙で衆議院議員に当選（6回目）。
1958（昭和33）年 64歳	4月の第28回総選挙で落選。
1959（昭和34）年 65歳	4月より青山学院大学教授となる（行政法学を講義）。
1960（昭和35）年 66歳	1月に民社党の結党に参加。10月の第29回総選挙で衆議院議員に当選（7回目）。
1962（昭和37）年 68歳	11月に青山学院大学構内にて講義を終えた後倒れ、慶應病院入院。
1963（昭和38）年 69歳	8月25日午前11時29分、聖路加病院にて死去。8月31日に青山学院大学礼拝堂において葬儀。

仁昌寺 正一プロフィール　NISHOJI, Shoichi

1950（昭和25）年生まれ
東北学院大学経済学部卒業
東北学院大学経済学部助手・講師・助教授を経て現職
「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会委員

新研究棟

法科大学院・総合研究棟

2003年3月から建設が進められていた東北学院大学土樋キャンパスの法科大学院・総合研究棟が完成し、2004年2月27日に法科大学院・総合研究棟1階図書室において定礎式ならびに献堂式が挙行された。

法科大学院・総合研究棟 全景
学内の研究機関も集約されている

エントランス

廊下

学生一人ひとりが自分専用の机を使用できる

教室

法廷教室

法廷教室

定礎式：前列右より、赤澤昭三理事長、倉松功前大学長（現学院長）、関根正行常任理事、佐々木哲夫宗教部長

定礎式

パイプオルガン設置

多賀城キャンパスにパイプオルガン設置

2004年4月、多賀城キャンパス礼拝堂に、東北学院礼拝堂では4台目となるパイプオルガンが新たに設置された。これにより土樋・泉・多賀城のすべてのキャンパス礼拝堂にパイプオルガンが設置されたことになる。設置を記念して多賀城キャンパス礼拝堂では講演会や演奏会などが開催された。

パイプオルガン

赤澤昭三理事長

今井奈緒子教授

パイプオルガン完成記念講演・演奏会

オルガン演奏：今井奈緒子教授
J·S·バッハ「プレリュードとフーガ ハ長調BWV547」他

講師：鈴木淳一氏
（日本基督教団石巻山城町教会牧師）
演題：「パイプオルガンの構造解説」

大学祭

工学部祭　10月9日～10日

台風の接近により初日は露天や野外ステージなどが中止。翌日も小雨と天候に恵まれなかったものの、チャリティバザーや展示発表、芸人ライブ、期間中のオープンキャンパスなどに大勢の人が訪れた。

本格的な秋の季節を迎えて、文化活動などの行事のシーズン到来。東北学院大学では、工学部祭を皮切りに各キャンパスで大学祭が開催された。

泉キャンパス祭

10月10日～11日

台風一過となった今年の泉キャンパス祭は家族連れの姿が目立ち、開店早々フリーマーケットには黒山の人だかり、露天やステージライブ、バルーンアートやビーズストラップ作りなどの各コーナーも人気を集めていた。

六軒丁祭　10月15日～17日

恒例となった仮装パレードが仙台市内一番丁通りを練り歩いて始まった六軒丁祭は、今年も数多くの露天が軒を連ね、歌やコントなどのステージライブや工夫を凝らした企画・展示発表で賑わいを見せていた。芸能人企画のトークショーには約3000人もの観客が集まり、大いに盛り上がった。

セツルの
活動紹介
ワークキャンプ

8号館
東北学院大学

六軒亭

第5回ホームカミングデー正門

受付風景　正門入口総合案内所

第5回 ホームカミングデー 『同窓祭』

平成16年10月16日(土)

受付風景

記念礼拝
司式・説教者：佐々木哲夫宗教部長
メッセージ：『地の塩、世の光』

記念礼拝

記念礼拝

2004年度学生懸賞論文入賞者（佳作）　左から大友麻希（人間科学1年）さん・星宮望学長・高田江美子（経済3年）さん

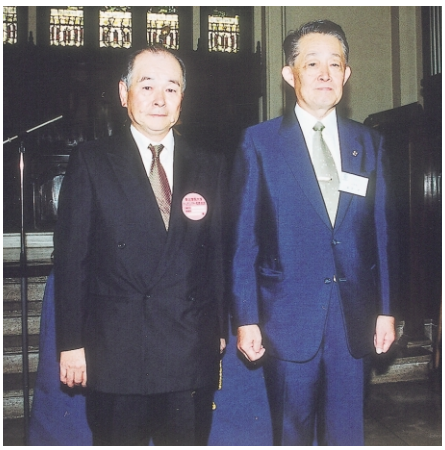
招待者代表あいさつ
小原優氏（昭和39年卒業生 ・同窓会泉支部長）

倉松功学院長・学長・同窓会長のあいさつ

“懐かしい出会いを求めて”

5年目を迎えた大学ホームカミングデーは、今年も大学祭の一般公開日に併せて開催された。キャンパスは早朝から大学祭を催す学生らとともに卒業後20年・30年・40年・50年目の方々で賑わいを見せ、「ホームカミングデー記念式典（学生懸賞論文表彰式など）」などの諸行事に230人を超える同窓生らが集まった。

特別講演会
講演者：本学大学長 星宮望氏（昭和35年卒業生）
演　題：『境界領域研究の悩み・喜び・反省』ー神経・筋系の電子的制御を例としてー



星宮望学長（右）と招待者代表小原優氏（左）

特別講演会を聴く会衆

熱心に資料室を見学する同窓生たち

星宮望学長のあいさつ

赤澤昭三理事長のあいさつ

同窓生スピーチ：小野宏氏(昭和29年卒)

中野田鶴子氏(昭和49年卒)

佐藤修一氏(昭和59年卒)

歓談の輪が広がる昼食風景

乾杯の音頭をとる星宮学長

歓談の輪が広がる昼食風景

記念抽選会
左は司会の志伯暁子氏
（昭和51年卒）

「モッシージャズオーケストラ」による演奏

昼食会場を後にし、大学祭を見て回る同窓生たち

文化講演会

第2回東北学院大学文化講演会

― 岩手県で開催 ―

昨年、秋田県での開催に続く第二回目の「東北学院大学文化講演会2004」が、11月27日にホテルメトロポリタン盛岡（盛岡市）で開催された。中村靖彦氏（農政ジャーナリスト・元NHK解説委員）による「食の安全ー何が問われているかー」と題した講演が行われ、岩手県支部・TG会の受付などの協力により、同級生、保護者、盛岡短大生など一般の方々を含む約300人が出席した。

受付風景

岩手県同窓会

盛岡支部
一関支部
釜石支部
北上・和賀支部
気仙支部
水沢支部
宮古支部

岩手県TG会

岩手医大TG会
岩手県教職員TG会
岩手県庁TG会
株木建設TG会
釜石市役所TG会
北日本銀行TG会
花巻市役所TG会
宮古市役所TG会

紫波支部企画の
特産品試食コーナー

講師：中村靖彦氏（農政ジャーナリスト・元NHK解説委員）
演題：「食の安全ー何が問われているかー」

星宮望学長

倉松功学院長

司会：竹宮恵子氏（一関支部事務局長・フリーアナウンサー）

想い出の校舎

想い出の東北学院 中学・高等学校校舎

1886（明治19）年に東北学院が創設され、東二番丁に初めて校舎が建てられたのは1905（明治28）年のことである。それから現在まで校舎の増築や建替えを経ながら数多くの生徒を送り出してきた東北学院中高は、平成17年春、伝統ある東二番丁を離れ宮城野区小鶴で新しいスタートを切ることになった。

中高校舎上空より

駐輪場へのスロープ

東二番丁通りより

グラウンドと南校舎

駐輪場

サッカーゴール

昇降口

事務室側入り口

食堂の券売機

事務室前

食堂

中高事務職員一同

中学卒業生によるタイル細工

ケースに飾られたトロフィーや賞状

廊下

廊下

ベル

ポスター

廊下

廊下

教室

進路指導室

保健室

礼拝堂

職員室

生物実験室

生物教官室

化学実験室

化学教官室

物理実験室
避難

物理教官室

体育館

柔道場

剣道場

剣道場

剣道場

格技場　　格技場

2004年学院祭

2004年中高クリスマス

東北学院中学・高等学校新キャンパス見学会

― 宮城野区小鶴 ―

建設中の新キャンパス遠景

平成17年4月開校となる宮城野区小鶴の東北学院中高新キャンパスは、平成15年より工事を進め、平成16年10月下旬に竣工検査を終えた。これを受けて11月6日と13日には新キャンパス見学会が開催され、在学生や保護者、一般の方々など約千人を超える見学者が新しいキャンパスを一目見ようと訪れた。

新キャンパス上空より

礼拝堂外観

礼拝堂内部

グラウンド

教室前の廊下

教室内

体育館外観

体育館内部

図書室

食堂

特集「東北学院―今に伝える、その歴史―」

特別展示

大正デモクラシーと東北学院
― 杉山元治郎と鈴木義男 ―

東北学院大学経済学部教授
調査委員会委員長　**岩本 由輝**

現在、本学礼拝堂（土樋キャンパス）の地階にある東北学院資料室で、開かれている標記の特別展では、2006年に創立120周年を迎える学校法人東北学院の記念事業の一環として「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会が収集した貴重な資料のなかから、二人の OBにかかわるもののごく一部を紹介している。多くの方々の目に触れることを期待する。

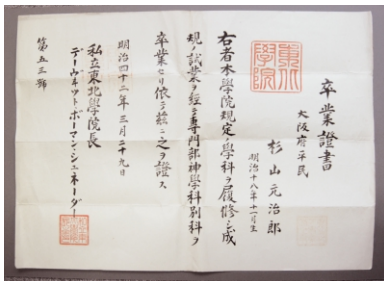
一人は第五代・第七代東北学院理事長杉山元治郎（1909年・神学部別科卒）、もう一人は第六代理事長鈴木義男（1912年・普通科卒）である。

この二人をとりあげたのは、二人が本学で学んだキリスト教精神に根ざした大正デモクラシーの実践的体現者として日本近代史に輝かしい足跡を残したからである。

杉山元治郎

杉山は、現大阪府泉佐野市の出身で、大阪府立農学校農科（現大阪府立大学農学部）に在学中、大阪南教会で受洗し、卒業後、和歌山県農会に就職したが、さらにキリスト教を学ぶために本学に入学する。その頃の杉山の写真が集合写真とともに多く提供されたので、当時の本学の雰囲気を知ることができ、また、杉山によって一緒に写っている人々の名前が明らかにされているものもあるので、今後の写真資料の整理にも役立てられる。

また、院長デーヴィット・ボーマン・シュネーダーから渡された杉山の卒業証書の現物もある。卒業後の杉山は仙台の東六番丁教会の牧師を経て、1910年から福島県の小高教会に牧師として赴任するが、赴任当時の自筆の説教集から文字を通して杉山の人となりを知ることもできる。小高教会での杉山は、農民との交流を深め、農学校で学



東北学院卒業証書

卒業記念写真　1909（明治42）年3月29日の卒業式当日に撮影
前列左から4人目、中央はシュネーダー院長

んだ農業技術を農民に伝え、信者以外にも多くのファンをえているが、そうしたなかで、農民といっても地主と小作人の間には大きな対立があることを知ったとき、断然、小作人のために立つことを決意し、1922年、日本農民組合を組織し、初代組合長として

日本農民組合機関誌「土地と自由」と「高校日本史」教科書

小作争議の指導に奔走する。日本農民組合の機関誌『土地と自由』（写真）に、杉山は指導的論文を発表するが、その復刻版も是非みていただきたい。

なお、杉山と日本農民組合をとりあげている『高校日本史B』の教科書も参考に供しておいた。

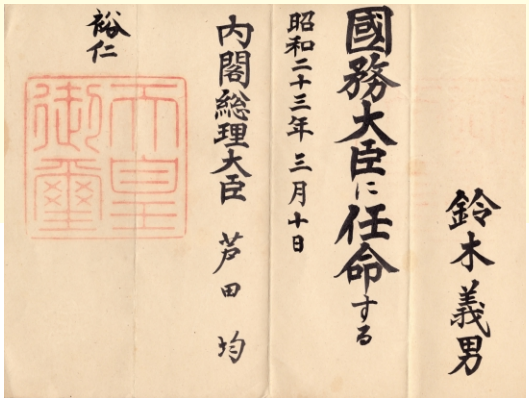
さらに、杉山は、1932年から46年まで無産政党の、1951年から63年まで日本社会党の代議士をつとめるが、1955年には衆議院副議長に就任する。

代議士時代の杉山

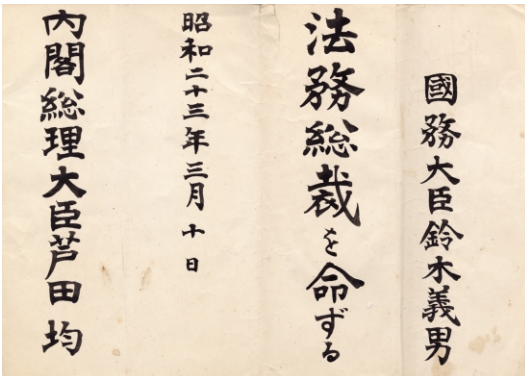
鈴木は福島県白河市の出身であるが、父は仙台美以教会の伝道師をつとめたこともあり、そうした縁で東北学院普通科に入学する。労働会や弁論部での活躍に目ざましいものがあり、『河北新報』などに再三とりあげられ、注目されている。

鈴木義男

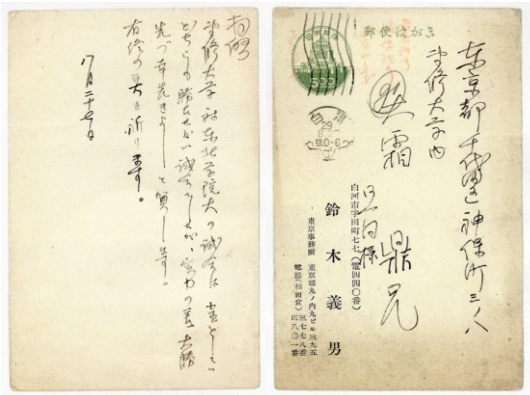
また、東北学院文学会の『東北文学』にもしばしば寄稿している。卒業後、第二高等学校一部甲類、東京帝国大学法学部に学び、1924年から東北帝国大学法文学部教授となるが、1931年に辞職し、弁護士になったことから鈴木のフェビアニストとしての本領が発揮されることになる。当時、鈴木は、弁護士といえども手がけることをためらったとされる治安維持法違反事件の被疑者の弁護を積極的に引き受けた。鈴木に弁護を依頼した人を列挙すると、河上肇（かわかみはじめ）・山田盛太郎（やまだもりたろう）・宮本百合子（みやもとゆりこ）・大内兵衛（おおうちひょうえ）・鈴木茂三郎（すずきもさぶろう）・宇野弘蔵（うのこうぞう）・有沢広巳（ありさわひろみ）・美濃部亮吉（みのべりょうきち）など、まさに多士済々である。目下、その弁護記録を集めているが、それは本学にとって誇ることのできる学問的資産となることは間違いない。鈴木は、敗戦後、最後の司法大臣と最初の法務総裁を務めるが、内閣総理大臣芦田均の手になる国務大臣と法務総裁の辞令も展示することができた。さらに鈴木は、本学の理事長時代、専修大学学長の任にあったが、1954年の全国野球選手権で、東北学院大学と専修大学が対戦することになり、「どちらも勝たせたい心境」であることを専修大学学長秘書に伝えたハガキもある。結果は専修大学のコールド勝ちであった。



国務大臣辞令（提供：鈴木瑠留子氏）



法務総裁辞令（提供：鈴木瑠留子氏）


専修大学学長秘書に伝えたハガキ

岩本 由輝プロフィール　IWAMOTO, Yoshiteru

1937（昭和12）年生まれ
東北大学経済学部卒業
山形大学人文学部講師・助教授・教授を経て
東北学院大学経済学部教授となる

キリスト教学科設置40周年記念式

11月４日、学内を会場に「キリスト教学科」創立40周年を記念し、記念礼拝・記念講演会・祝会が開催された。

記念撮影

受付風景

記念礼拝
説教者：酒井薫氏（昭和54年卒、仙台北三番丁教会牧師）
メッセージ「造り上げる言葉」

記念講演会
講師：松田和憲氏（昭和46年卒、関東学院大学教授、日本バプテスト同盟関東学院教会牧師）
演題：「これからの日本における福音宣教像を考える」

ドラフト会議

仁部（にべ）　智（さとし）投手

本学硬式野球部OBで、2003年度プロ野球ドラフト会議において広島東洋カープに入団した。本学出身でプロ野球選手となるのは初めて。
最高球速146キロの直球とチェンジアップなどの変化球の制球力が武器。

母校の大学に倉松功前学長（現学院長）を訪問する仁部選手

星（ほし）　孝典（たかのり）捕手

2004年度プロ野球ドラフト会議において読売巨人軍に入団した。本学出身プロ野球選手二人目で、現役学生が指名されたのは初めて。二塁送球の平均が1.8秒の強肩。

高木龍一郎部長（左）、加藤大樹監督（右）と、記者会見場で握手を交わす星選手

記者会見後、野球部員や関係者に囲まれて

左から巨人の末次編集部長、星選手、大森スカウト

2004（平成16）年時事

		東北学院に関する時事
1月	9日	TG推薦入試合格発表
	11日	法務研究科前期日程入学試験（～12日）
	17日	名誉教授・元経済学部教授 米沢治文氏逝去
	19日	東北学院高校推薦入学面接
	20日	本学と北海学園大学との単位交換協定調印式
		榴ケ岡高校推薦入試
	21日	元本学院理事・評議員 松本兼明氏逝去
	22日	法務研究科前期日程入学試験合格発表
	29日	中学入学試験／平成15年度大学体育会表彰式
	31日	中学入試合格発表
2月	1日	大学前期日程入試（～4日）
	2日	東北学院高校入試
	4日	大学外国人留学生特別入試／榴ケ岡高校入試
	5日	東北学院高校入試合格発表
	10日	榴ケ岡高校入試合格発表
	12日	一般入学試験前期日程・外国人留学生特別入学試験合格発表
	24日	大学院入試（前期・修士課程）
	25日	大学院入試（後期課程）
	27日	法科大学院・総合研究棟定礎式・献堂式
3月	1日	東北学院高校卒業式／第43回榴ケ岡高校卒業式
		平成15年度課外活動功労者表彰状授与式・平成15年度オリエンテーション・リーダー功労者感謝状贈呈式、平成16年度オリエンテーション・リーダー委嘱状交付式
	2日	法務研究科後期日程試験（～3日）
	5日	ロッテ球団代表川北智一OBが倉松功学長を表敬訪問
	8日	夜間主コース社会人特別入学試験B日程、転学部・転学科試験、編入学試験B日程、再入学試験
	9日	一般入学試験後期日程
	10日	法務研究科後期日程試験合格発表
	11日	中高転入試験
	12日	中高転入試験合格発表
	15日	原級止・再入学・復学・研究生発表
	16日	一般入学試験後期日程、夜間主コース社会人特別入試B日程、転学部・転学科試験、編入学試験B日程合格発表
		幼稚園卒園式
	24日	大学卒業式・学位記授与式
		ニューサウスウェールズ大学と学術交流および教育協力に関する国際交流（包括）協定締結
	25日	中学校卒業式
	26日	本学・東北文化学園大学・宮城教育大学・仙台市による「学都仙台サテライトキャンパス」開設協定調印式
	31日	退職者辞令交付式
4月	1日	役職者辞令交付式／新任職員辞令交付式
		大学長に星宮望氏が就任
		法学部長に齋藤誠氏が就任
		教養学部長に佐々木俊三氏が就任
		法人事務局長に飯土井公洋氏が就任
		大学総務部長に高橋征士氏が就任
		大学施設部長に伊藤浩吉氏が就任
		中・高等学校長に松本芳哉氏が就任
		中・高等学校長副校長に渡辺厚氏が就任
		幼稚園事務長に布田茂雄氏が就任
		須田稔（元文学部教授）・畑中孝實（元文学部教授）・倉松功（元文学部教授）・野口和男（元経済学部教授）・大島亮一郎（元工学部教授）・水谷弘（元工学部教授）・佐々木迪之（元工学部教授）・久野昇司（元工学部教授）・阿部泰夫（元工学部教授）・尾坂芳夫（元工学部教授）・長谷川精一（元教養学部教授）・高橋巌（元教養学部教授）らに名誉教授の称号
		星宮望学長に東北大学より名誉教授の称号
	5日	大学入学式
	9日	中高入学式／榴ケ岡高校第46回入学式
	12日	幼稚園入園式
	16日	本学・東北文化学園大学・宮城教育大学・仙台市の連携による「学都仙台サテライトキャンパス」（単位互換科目）開講
	22日	大学体育会入会式／入学時特待生表彰式（泉）／入学時特待生表彰式（多賀城）
	30日	中高奨学会総会
		元中高教諭 津田正雄氏逝去
5月	1日	大学施設部長に飯土井公洋氏が就任（兼任）
	6日	多賀城キャンパス礼拝堂パイプオルガン奉献式
	13日	男子バスケットボールU―18日本代表選手に東北学院高校の佐々木瑛君が選抜される
		第27回李相伯杯争奪日韓学生バスケットボール競技大会日本代表に青山景子さんが選抜される
	15日	創立118周年記念式／墓前礼拝／TG十五日会／平成16年度同窓会総会
	20日	体育会三大会結団式
	22日	大学後援会総会
	27日	大学文化団体連合会入会式
	29日	第55回対青山学院総合定期戦（～31日）
		榴ケ岡高校奨学会総会

		東北学院に関する時事
6月	1日	理事長に赤澤昭三氏が就任
	2日	大学施設部長に清水時郎氏が就任
	5日	県高校総体（～7日）
	6日	全日本学生選手権個人ロードレースで蛯名洋平さんが優勝、石崎和寿さんが三位入賞
	12日	第50回対北海学園大学総合定期戦記念大会（～14日）
	17日	東北地区大学総合体育大会（～7月3日）
		サヴォア大学と学術交流および教育協力に関する国際交流（包括）協定締結
	24日	大学院博士前期課程（修士課程）入学特別選考
7月	1日	大学院博士前期課程（修士課程）入学特別選考合格発表
	2日	特待生・優等生表彰式（泉）
	5日	特待生・優等生表彰式（土樋）
	7日	特待生・優等生表彰式（土樋：夜間主コース）
		多賀城キャンパス礼拝堂オルガン完成記念講演・演奏会
	15日	特待生・優等生表彰式（多賀城）／中高奨学会（～16日）
	27日	2004年度アーサイナス大学夏期留学生一行出発
		全国高校囲碁選手権大会で東北学院高校囲碁部がベスト8（～29日）
	31日	全国高校総合体育大会柔道競技で東北学院高校柔道部 角田雄也君がベスト8（～8月4日）
8月	2日	第27回対青山学院大学二部交流定期戦
	3日	オープンキャンパス（泉・多賀城）
	7日	第23回対北海学園大学二部総合定期戦
	26日	全日本大学選手権大会で茄子川雅彦さんと会田貴浩さんが男子ダブルスカル準優勝（～29日）
9月	3日	榴祭（～4日）
	4日	中高学院祭（～5日）
	11日	アテネパラリンピック競技大会に柔道コーチとして遠藤義安職員が派遣される
	12日	名誉教授・元文学部教授 平出英男氏が逝去
	30日	9月期卒業式・学位授与式
10月	7日	大学院博士前期課程及び修士課程入学試験（秋期分）／編入学試験A日程
	9日	工学部祭（～10日）
	10日	大学祭（泉、～11日）
	15日	大学院博士前期課程及び修士課程入学試験（秋期分）合格発表／編入学試験A日程合格発表
		大学祭（土樋、～17日）／中高奨学会

		東北学院に関する時事
10月	16日	第5回ホームカミングデー（同窓祭）
	28日	元文学部教授 岩崎敏夫氏逝去
	31日	全日本学生ライフル射撃選手権大会50メートル・ライフル伏射競技で男子ライフル射撃部が優勝
11月	4日	キリスト教学科創立40周年記念礼拝・講演会
	6日	中高新キャンパス見学会
		第12回ケーニヒ杯国際大会でフェンシング日本代表の鈴木誠史君（中学）が三位入賞（～7日）
		J1セレッソ大阪に榴ケ岡高校 丹野研太君が入団へ
	12日	推薦入学試験、AO入学試験A日程第二次選抜、夜間主コース社会人特別入学試験日A日程
	13日	中高新キャンパス見学会
	16日	星宮望第四代学長就任披露
	17日	大学硬式野球部 星孝典捕手がドラフト会議において読売巨人軍から指名される
	19日	推薦入学試験、AO入学試験A日程第二次選抜、夜間主コース社会人特別入学試験A日程合格発表
	27日	第2回東北学院大学文化講演会2004（盛岡市） 講師：中村靖彦氏
12月	3日	泉キャンパスクリスマス
	15日	大学クリスマス礼拝（土樋・泉）
	16日	大学クリスマス礼拝（多賀城）
	17日	AO入学試験B日程第二次選抜
		TG推薦入学試験
		公開東北学院クリスマス礼拝
	20日	榴ケ岡高校学校クリスマス
	22日	AO入学試験B日程合格発表／中高クリスマス礼拝
	24日	教職員クリスマス

規　程

東北学院資料室規程

（設置および名称）

第１条　本院に、東北学院資料室（以下「資料室」という。）を置く。

（目的）

第２条　資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

（事業）

第３条　資料室は、第２条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

一　資料の収集、整理、および保存に関すること。

二　資料に関係する刊行物の編集および出版に関すること。

三　資料の展示および公開に関すること。

四　資料の閲覧および貸出に関すること。

五　資料に関係する情報の提供に関すること。

六　その他、必要と認められる事業に関すること。

（運営委員会の設置）

第４条　資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会（以下「運営委員会」という。）を設ける。

（運営委員会の構成）

第５条　運営委員会は、次の者をもって構成する。

一　学院長

二　総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長

三　中学・高等学校副校長１名、榴ヶ岡高等学校副校長、中学・高等学校事務長、榴ヶ岡高等学校事務長、幼稚園教頭

四　法人事務局長、庶務部長、庶務課長、広報課長

２　運営委員会は学院長が招集しその議長となる。

３　運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。

４　運営委員会の事務は、広報課が行う。

（資料室の管理・事務）

第６条　資料室の管理・事務は、広報課がこれを行う。

（規則の改廃）

第７条　本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

附則

本規程は、2001（平成13）年４月１日から施行する。

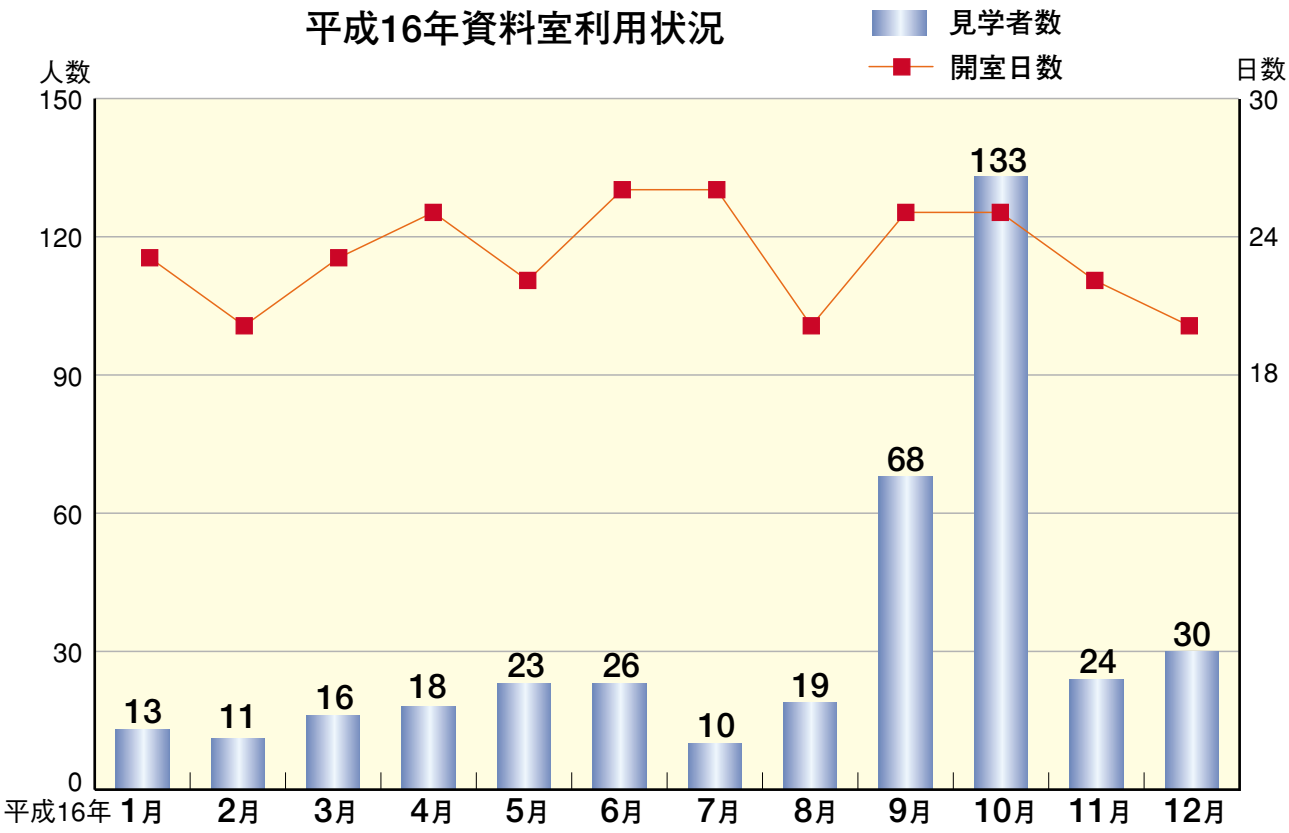
附則

本規程は、2003（平成15）年４月１日から一部改正施行する。

平成16年資料室来室状況

2004（平成16）年

2月13日	TG推薦者誓約式参列者父母（8名）
3月13日	吉田亀太郎の孫（田村忠幸氏）
5月14日	塩釜高校教員と生徒（16名）
9月28日	志田郡成人大学（56名）
10月16日	ホームカミングデー（70名）
10月23日	古川市教育委員会（44名）
11月 1日	吉野作造記念館館長
12月20日	東海大学付属高校教員（2名）



東北学院資料室運営委員会

委員長	学院長	倉松　功
委　員	副学長	関谷　登
	宗教部長	佐々木哲夫
	総務部長	高橋　征士
	総務部次長	菅野　健
	中学・高等学校副校長	渡邉　直道
	中学・高等学校事務長	荒　孝夫
	榴ケ岡高等学校副校長	久能　隆博
	榴ケ岡高等学校事務長	高橋　正博
	幼稚園教頭	多田　征子
	法人事務局長	飯土井公洋
	庶務部長	大童　敬郎
	広報課長	吉田　知致

広報課

広報課長	吉田　知致
広報課長補佐	久保田　博
	早坂　友行
	渡辺　洋樹
	金内　夏林

資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

開室時間

授業期間中

月～金　10:30～16:00
但し、昼休み時間（12:40～13:40まで）を除きます。
土　10:30～12:00
（祝祭日はお休みいたします。）

長期休暇（春休み・夏休み・冬休み）中

月～金　10:00～15:30
但し、昼休み時間（12:40～13:40まで）を除きます。
（土・祝祭日はお休みいたします。）

発行日　2004（平成16）年12月31日
編　集　東北学院資料室運営委員会
発　行　学校法人 東北学院
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6423　FAX.022-264-6478
http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/
印　刷　東北堂印刷株式会社